

10月10日 15:20-18:30

開催校企画 レクチャーパフォーマンス&シンポジウム「新しい身体論」

司会：古川真宏（関西学院大学）

発表：太田充胤（東京大学）

伊藤亜紗（東京科学大学）

田中均（大阪大学）

画面の中にダンスが氾濫するようになって久しい。興味深いことに、踊っているのは生身の人間ばかりではない。描画された 2D のキャラクターが踊り、それを人間が模倣し、さらにその動きがモーションデータとして書き出され別の 3DCG モデルを踊らせる——今日のデジタル・ダンスの生態系では、たとえばこのようなかたちで、ダンスがモノとヒトとの垣根を超えて循環している。

従来、ダンスをはじめとした上演芸術はその場かぎりの出来事として理解され、演者と鑑賞者との身体的共在はその重要な成立条件だと考えられてきた。エリカ・フィッシャー＝リヒテは『パフォーマンスの美学』（原著 2004 年）で、上演芸術の固有性を両者間に生じるフィードバック・ループに求め、上演を通じて演者が「現前」する状態はこの相互作用に基づくとした。この立場において、記録映像は「現前効果」をもたらすものの、それは決して現前そのものではないと考えられている。

翻って、今日のメディア環境は様々なかたちで芸術の鑑賞体験を変化させてきた。ことダンスにおいて、その変化は、複製された記録映像が流通するという事態にとどまらない。民主化された情報技術・サービスの下、ダンスはしばしば肉体（モデル）と運動（モーションデータ）とに分離され、それぞれが複製されて流通し、鑑賞者のもとで任意の組み合わせにおいて再構成される。リアルタイムの演算・描画は、記録映像とは明らかに質感の異なる運動を、鑑賞者の介入に応答するかたちで生成しつづける。大胆に言えば、このとき画面の中には演者が現前している、という感覚を覚える。

ヴァルター・ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』にはすでに映像技術による俳優の複製への言及があるが、今日の身体芸術をめぐる複製技術は明らかにこれと一線を画している。のみならず、上記のような技術体系はデータ＝非生命が「踊る」ことをも可能にしている点で、ダンスという芸術形態の根本を揺るがしていると思われる。もっとも、これをダンスとは認めない立場、ダンスではあるが現前効果は認めない立場、現前効果は有するが現前とは認めない立場など、当然ながら様々な見方があるであろう。

発表者は上記のような事態について、過去に批評家という立脚点から紹介し検討してきた（『踊るのは新しい体』フィルムアート社、2025 年）。本発表では、今日のメディア・技術環境における「ダンス」の諸実例を紹介しながら、美学領域と接続しうらと思われる論点を提示し広く問うことを目的としたい。

社会運動の歴史をさかのぼると、「黒人の美学 black aesthetic」(1960 年代末～1970 年代) や「障害の美学 disability/crip aesthetic」(2010 年代～) など、さまざまな「美学」にかかわる実践があることが分かる。これらの実践の興味深い特徴は、権利を求める運動が一定の成功をみたあとに、それへの一種の反動として開始される「遅れてやってくる運動」であるという点にある。たとえば「黒人の美学」運動は、1950 年代末から活発化した公民権運動が 1964 年の公民権法制定等によって収束したあと、黒人の身体がもつ固有の美的価値（「ブラック・イズ・ビューティフル」）を認めさせる一種の「公共的感性の改革」として始まった。権利をめぐる運動のゴールが「黒人も白人も同じ」であったのに対し、美学をめぐる運動のゴールが「黒人と白人は違う」である点に、その反動性がある。その目的は、権利が認められてもなお美的には排除されていた、つまり社会的規範から逸脱した醜い存在とみなされていた自分たちの身体を、安心して安らげていられる居心地がよいものに変えることにあった。

本発表では、このような歴史や運動スタイルの変遷を踏まえ、マイノリティの身体に対する美的な価値がどのように「発見」され、それが人間の身体に対する見方をどのように更新していったのかを明らかにする。そのうえで、発表者も当事者として関わっている「非流暢の美学 dysfluent aesthetic」の実践について紹介する。これは吃音等の当事者および非当事者によって行われている実践で、「流暢でないこと」がもつ美的な価値を、デザイン、アート、音楽などの表現を通じて探索する活動である。たとえば、ロンドン在住のデザイナー、コナー・フォーランは、吃音当事者の喋り方を表記することができる「非流暢フォント Dysfluent mono」を開発し、このフォントを用いて雑誌やビルボードアートなどを発表している。あるいはポートランド在住のミュージシャン、ルーク・ウィーランドは、さまざまな吃音当事者の声をもとにした楽曲を作り、演奏している。こうした試みは、吃音が、特定の個人の身体に内在する特徴なのではなく、話す者（当事者）と聞く者（非当事者）のあいだに成立する特有の時間性をおびたコミュニケーションの問題である、という見方を提示するとともに、障害を一種の謎としてとらえ、そこからさまざまな意味を取り出そうとする終わりなき実験という側面を持っている。

本報告では、身体との出会いが、それを見る者の生にどのような変容をもたらすのかについて考察する。ただし、ここで取り上げる「身体」とは人間の身体そのものではなく、リルケの詩「アポロンのアルカイックなトルソ」（1908 年）に登場するトルソである。頭部を欠くこのトルソは、それにもかかわらず「お前を見ないところは存在しない」と語られ、この詩は「お前は自分の生を変えねばならない」という宣告によって締めくくられる。

リチャード・シュスターマンは論文「越境的形成（Trans-formation）としての自己変容」（2023 年）において、リルケが参照したとされる《ミレトスのトルソ》の形態や『若き詩人への手紙』（1903-08 年）を手がかりに、この詩が男性と女性という二元論的なジェンダー観を乗り越えた人間性のモデルを提示していると解釈する。これは、トルソを古代ギリシアのアスリート的身体の理想として捉えたペーター・スローターダイクの解釈への批判でもある。スローターダイクは『お前は自分の生を変えねばならない』（2009 年）において、人間を「より高次の生」を目指して不断に修練すべき存在として捉え、トルソをその修練を命じる存在として位置づけているが、修練する生の事例として彼が挙げるのはほぼ男性のそれに限られる。

とはいえ、両者の差異と同時に類似性も見逃せない。自己認識を通じた改善と不可能への挑戦という違いはあるものの、両者とも自己変容を、現在の自己を乗り越え、よりよい生へ向かうこととして規範的に捉えているからである。

これに対して、同じ詩のうちに異なる生の変容のモデルを見て取ったのがアーサー・C・ダントーである。彼は『美への悪態』（2003 年）においてこの詩を取り上げ、「この彫刻が詩人に与えたような影響をこの詩の読者が受け取らないなら、それは何かの間違いだ」と述べる。そして、この詩に促されるようにして、別の芸術作品、すなわちヨアヒム・ウテワール《ベレウスとテティスの結婚》（1610 年）との出会いについて語っている。ダントーはこの絵画のうちに自らの似姿を見いだしたが、それは彼をよりよい生へと鼓舞するというより、自身の老いと死を自覚し、受け入れさせるものであった。

ダントーは、作品解釈が解釈者の自己解釈へと展開する過程を描くことで、上昇とも改善とも異なる生の変容の可能性を示しているのである。